

## 研究ノート

## 竹内愛二のケースワーク論再考

——「社会的基督教」とのかかわりから見出す新たな視角——

今 堀 美 樹

## I はじめに

竹内愛二（1895-1980）は、日本で最初にケースワークの体系的な著書である『ケース・ワークの理論と実際』（巖松堂、1938年）をあらわしたことから、日本におけるケースワークの祖述者としての地位を得たともいわれ、日本ソーシャルワーク理論史には逸することのできない存在である。他に代表的な著書として『専門社会事業研究』（弘文堂、1959年）、『実践福祉社会学』（弘文堂、1966年）がある。竹内の弟子である岡本民夫氏は、「欧米における最新の理論の応用に加えて、実際の事例を使ってケースワークの有効性やその応用可能性さらにはそれが伝授可能、学習可能、習得可能なものであることを説得しよう」としたと紹介し、事例研究を媒介とする定着化への努力について高く評価している。さらに、日本社会福祉学会設立の中心的な役割を果たし、日本基督教社会福祉学会の創立にあたっては初代の会長をつとめたことでも知られる。

しかしこうした耳目を集める活躍の一方、竹内が研究者としての歩みを始める時期に「社会的基督教」という宗教思想運動に身を投じ、運動の中心人物であった中島重（1888-1946）の「片腕」とも称されていたことは、これまであまり注目されては来なかった。吉田久一（1915-2005）は、科学的社会事業という角度からケースワークを研究した開拓者として評価し、ケースワーク研究

に打ち込んだ「竹内ケースワークの50年」<sup>(4)</sup>を、「出発のころ」「戦争中のころ」「占領下のころ」「高度経済成長後から現在」の四段階に分け、「出発のころ」から「戦争中のころ」に「社会的基督教」にかかわった、その思想的土壌について竹内本人に確認をしている。しかしその際、残念ながら十分な回答を得ることはできなかった。<sup>(5)</sup>しかし図らずも、竹内が亡くなった直後に開催された「日本社会福祉学の歴史」と題した座談会<sup>(6)</sup>で、嶋田啓一郎（1909-2003）は「社会的基督教」にかかわった竹内の思想的土壌には、アメリカ留学時代に共鳴した「社会的福音運動」<sup>(7)</sup>があったと説明している。<sup>(8)</sup>

竹内はアメリカへの留学により、「ケースワーク」と「社会的福音運動」という、その後の生き方が決定づけられる出会いを得たものと考えられる。しかしそもそも、経済的には恵まれずとも牧師の息子としてクリスチャンホームに育った幼少期や、文字通りの苦学によって学問研究の道を志した青年期において、そうした出会いを希求する思想的土壌は、すでに育まれていたものと考えられる。そしてその「良い地」に、「社会的基督教」という種が播かれた。筆者はこの「社会的基督教」という種が根を張ることによってこそ、竹内のケースワーク研究及び実践が、豊かに実ったのではないかと考える。

こうしたことから、本論は竹内のケースワーク論を「社会的基督教」とのかかわりから読み解くための新たな視角を、先行研究の検討によって導き出すことを目指す。そして、それら全ての視角が前提とする、中島の「社会的基督教」思想の特徴と関連づけた竹内ケースワーク論の思想的特徴を、わずかながらも明らかにしたいと考える。

## II 竹内ケースワーク論に対する評価と視角

ケースワーク研究を中心とした竹内の所説は、これまで多くの研究者によって取り上げられ、多種多様な批判及び評価がなされてきた。本論では、そのう

ちよりいくつかを取り上げ、検討していくことにより、竹内と「社会的基督教」とのかかわりを検証する必要性を示す、新たな視角をいくつか導き出していきたい。

## 1 小倉襄二（1926–2014）による“戦時下抵抗の不在”という批判

年代を追って、まず小倉による、以下のような指摘について検討していきたい。

竹内愛二氏もキリスト者として社会事業論、とくにケース・ワークについて、発言している。太平洋戦争の頃より、ケース・ワークを「教育的個別厚生事業」と訳し、たんに要保護者にとどまらず、国民全体の全生活問題としてとりあげた。竹内の厚生事業ケース・ワークの定義は「個別生活指導法とは、個々人をして社会的環境に適応せしむることに依って、其生活を全ふせしめ、且つ国家目的完遂に於る職能奉仕者としての人格を向上発展せしむるために用ひらるる科学的認識に即したる方法及過程を謂ふ」と規定する。体制一状況への“適応”と恣意的なケース・ワーク論のすりかえがおこなわれている。<sup>(9)</sup>

小倉は、戦時体制下における竹内のケースワーク論に対して、「体制一状況への“適応”」「恣意的なケース・ワーク論のすりかえ」というように、厳しく批判している。しかしその反面で、「大正デモクラシー期に、時代のさまざまな潮流に大きく揺らぎながらも、それぞれの現場と拠点において、キリスト者の愛と祈りの社会事業実践がそだっていた」というように、明治以降のプロテスタント社会事業について、その意義と成果を高く評価もしている。だからこそ、「戦時下における基督教社会事業における抵抗の不在」<sup>(11)</sup>が承服できず、その事態の解明に力を尽くそうと努力したものと考えられる。しかしその結果と

して、竹内のケースワーク論に対し、「時代への迎合と不必要なまでの状況肯定、抵抗の完全不在<sup>(12)</sup>」というような、厳しい批判をせざるを得なくなったものと考えられる。

一方で、まさに戦時下という時期は、竹内が「社会的基督教」に深く関わった時期であり、本論が焦点をあてている時期でもある。小倉が竹内の論稿より引用した文章は、上記したもの以外にもいくつかあるが、なかには「社会的基督教」誌に掲載されたものも含まれている。このことから、戦時下における抵抗の不在という批判は、「社会的基督教」という宗教運動自体にも向けられているように受け取ることができる。なぜならば、太平洋戦争勃発前の時期に、『社会的基督教』誌には数多くの論稿に「東亜共同体論」への共鳴が、色濃く見出されるようになり、批判されるべきは竹内のみではないからである。一方でこれらの論稿は、三木清（1897-1945）らの昭和研究会が主唱した「東亜共同体論」に共鳴して著されたものと考えられ、竹内は「社会的基督教」誌におけるそうした論陣の、中島や溝口靖夫（1906-1978）と並ぶ急先鋒的な存在であったと考えられる<sup>(13)</sup>。まさに小倉が引用している文章には、これらの論稿の一部が含まれていて、「信仰と事業の実質をはなれて、“壮大な論理と空疎な精神主義”、ファナティズムが横行して、いきおい、つじつまをあわせる迎合へと推転していく<sup>(14)</sup>」というような、後に続く文脈での指摘は、「東亜共同体論」に共鳴していく「社会的基督教」自体に向けられた批判として、筆者には読み取れるのである。

しかし筆者は、竹内をはじめとし、「東亜共同体論」に関する論稿を寄せたメンバー達の意図を、単に「迎合」と断ずるのは早計ではないかと考える。何故ならば、この「東亜共同体論」に対しては、識者の間にも共通した見解は定まっておらず、近年においてもその再検討が続けられているからである<sup>(15)</sup>。また、「むしろ事実をていねいに追うとき、かれの小さな抵抗と小さな追従、境界線上で葛藤とバランスを発見するのであり、そのせめぎあいのうちに現在のわれ

われへの問いをも見出す<sup>(16)</sup>」というような、戦時下における先達に対し、その抵抗と追従を二項対立的に色分けする方法的立場を拒否する遠藤浩氏の研究姿勢に、筆者も深い共感を覚えるからである。

こうしたことから、「東亜共同体論」に関する竹内の論稿を、今日の「東亜共同体論」の研究水準を反映させて再評価することは、竹内の「社会的基督教」とのかかわりから見出される、重要な視角であると考えられる。

## 2 杉山博昭氏による“歴史的把握を欠いた社会福祉理解”という批判

戦時下における竹内のケースワーク論に対しては、杉山氏による以下のような指摘もある。続けて以下に検討しておきたい。

竹内にとっての問題は、ケースワークを戦時体制に適應しようとしたことであり、しかもそれがケースワークを戦時体制にむけて変質させようという意識なしに行われたことである。つまり、竹内は必ずしもケースワーク論を戦時体制用にねじまげることはせずに、むしろ純粋なまま発展させようとして成功した<sup>(17)</sup>。

これは、戦時体制下にケースワーク論を純粋なまま発展させることに成功した、ということをして、「歴史的把握を欠いた社会福祉理解<sup>(18)</sup>」として、竹内のケースワーク論をその本質において批判したものと考えられる。しかし、よくよく考えてみるならば、竹内がアメリカにおいて修得したケースワーク理論は、第1次世界大戦期にみられた、「砲弾衝撃」(shell shock)による戦争神経症(war neurosis)に対処するため、フロイト(Freud, Sigmund 1856-1939)の精神分析学説を応用することによって、飛躍的に発展したとされるものである<sup>(19)</sup>。そして、このような経緯で発展したことが、社会福祉の本質理解をめぐって社会科学の立場からの視角とケースワーカーの視角との間に、大きな断絶状

態を生じさせたという指摘が、既に岡本氏によって以下のようになされている。

周知のように、ケースワークは、その性格において、極めて心理学的、精神医学的傾向が強く、具体的な活動のプロセスでは、「人間関係の調整のために働く社会事業家における過程（手続）の体系化」されたものであることは事実であり、社会科学的立場からこれらを見る時、超歴史的で、社会を超えた認識となりやすい傾向のものである。ここに、あらためて社会福祉の本質理解をめぐる分析視角の差異と具体的援助過程におけるケースワーカーの視角との間に大きな断絶状態が生じるのである。<sup>(20)</sup>

つまり、フロイトの精神分析学説を応用することによって発展したケースワーク理論は、歴史認識のみならず、国家やイデオロギー等の制約をも受けない、極めて心理学的、精神医学的傾向をもつものであり、その意味で普遍性をも持つと考えられるのだ。

しかしこのような、ケースワークの技術としての普遍性と、その技術としての限界について、阿部志郎氏による次のような指摘もある。

そういう中で社会福祉の技術—ケースワークとかその他の技術は、普遍性を持っておりますので、実践を支えてくれますが、しかし、その次元では、人間の深い真情にまで迫っていくことができないという悩みもあると思うのです。<sup>(21)</sup>

そしてこの、阿部氏がいうところの“人間の深い真情にまでせまっていくことができない”という指摘に関連して、ロロ・メイ（1909-1994）は次のように指摘する。つまり、「フロイド独特の天分は、彼がこうした深層心理学的洞察を当時の自然科学的枠組みのなかに移したところにある」と、その功績を評<sup>(22)</sup>

価する一方で、そうした科学としての人間理解は、「人間を機械イメージにゆずりわたすことになる<sup>(23)</sup>」というように、その危険性を鋭く指摘するのである。

これら阿部氏やメイの指摘は、人間という存在が、技術や科学のみによっては真に理解し働きかけることのできない側面をもつことを、指摘したものであると考えられる。そしてそれは同時に、科学や技術を用いて人間に働きかける際においても、「何のためにそれを行うのか」という、ケースワーカー自身の価値が問われ、思想的基盤が問われることになることを、指摘する事にもつながると考えられる。そして、今日における社会福祉教育の閉塞的状況を招いたのは、歴史把握によってこそ生まれる価値や思想が、竹内のケースワーク論に欠落していたことにその遠因がある、という杉山氏の問題提起にも通底<sup>(24)</sup>していると、筆者は理解するのである。

しかしだからこそ、「社会的基督教」とのかかわりから竹内ケースワーク論を再考する必要がある。それは竹内ケースワーク論の思想的基盤を問うこととなり、この基盤を明らかにすることは、今日におけるソーシャルワークの研究・実践・教育の深まりに貢献することにつながると、筆者は考えるからだ。竹内のケースワーク論を、「社会的基督教」とのかかわりから新たに読み解き、再評価する、何より重要な視角は、まさにここにある。

### 3 孝橋正一（1912-1999）の“社会事業本質論争”における批判

次に孝橋の『続社会事業の基本問題—社会科学的的方法論による批判的研究—<sup>(25)</sup>』における、次のような指摘について考えてみたい。

見られるように、竹内理論においても社会事業の社会制度的位置づけが重視されるけれども、その用法は超越社会学的であって、社会事業の社会科学的規定、すなわち、いまの場合、歴史的・社会的規定を意味するものではない。だから、そこでは社会事業から資本主義制度の構造的必然とし

て理論的・現実的に生み落す、その社会問題に対応する社会的対策の一形態としての認識把握が前提的に脱落し、ただ社会的諸現象が網羅的・現象的に並べられるとともに分類・整理されているだけであって、このような社会的諸現象の奥に共通的に貫徹している本質的な要因が何であるかについてはまったく<sup>(26)</sup> 解明されないまま残されている。

これは、「戦後社会福祉研究の起点<sup>(27)</sup>」というように宮田和明氏が位置づける「社会事業本質論争」の一部ともなった、孝橋の、竹内ケースワーク論に対する批判の一部である。それは、「占領下での社会事業の戦後改革を経て、新たな理念に基づく社会福祉が成立したが、朝鮮戦争の勃発を契機とする政治的・経済的反動期には、社会福祉の「理念」と「現実」との乖離はかえって拡大し、「社会福祉とは何か」が改めて問い直されることになった<sup>(28)</sup>」なか、起ってきた論争であり、そのなかで、孝橋は竹内のケースワーク論に対しても矛先を向け、厳しく批判したものと考えられる。この論争について、ここに詳しく紹介することは紙幅の都合上、省略せざるを得ないが、岡本氏による、孝橋のソーシャルワーク批判に対する再批判、そしてこの論争自体に対する評価は、竹内のケースワーク論の立ち位置を明確化することにもつながるので、以下に引用しておきたい。

つまり孝橋理論は社会政策の研究方法論を社会福祉事象の解明に援用して体系化したもので、政策としての社会福祉（社会事業）を論じたものである。いわば、一国の社会福祉問題の解決緩和にどのように対処するかについてマクロな視点からの理論体系であり、必ずしも第一線の現場において、利用者の待たなしの課題に、対応している現場職員の業務遂行を効率よく進める手続き上の「技術」を述べているわけではなく、孝橋理論からすると、現場で活用されているいわゆるソーシャルワークのあり方を政



策論の立場から批判的に論じたものである。したがって、その論理からすると、現場におけるあれこれの具体的事情にどのように対処するかについては、論理の一貫性からすると、木に竹を接ぐことになり、一貫性と整合性に欠けるとする立場は、孝橋の理論からすると、当然の帰結であるといわなければならない。<sup>(29)</sup>

このように岡本氏は、ソーシャルワークのあり方を政策論の立場から批判的に論じること自体に無理があるとして、こうした論争自体が、「土台社会福祉事象を捉える視点、観点が異なるものであり、議論がかみあわないのは当然である」<sup>(30)</sup>と述べ、「あまり生産的な議論にはならず、一方では、技術論批判として批判し去る論理となり、他方では現実的な課題として技術の有用性を強調して譲らないという立場が平行線を展開することになり、これらを凌駕する新たな立論が提供されないまま推移した」<sup>(31)</sup>というように評価している。竹内のケースワーク論に対する孝橋の、「ただ社会的諸現象が網羅的・現象的に並べられるとともに分類・整理されているだけ」というような批判に対しても、あまり生産的な議論に結びつくものではない、と岡本氏は評価しているものと考えられる。

しかしその反面で、竹内のケースワーク論は、孝橋が批判するように、全体を貫く論理的一貫性が見出しにくく、社会福祉実践に不可欠となる知的・技術的な要素が網羅されているのみ、との印象を、ともすれば読者にもたせてしまうであろうことを、筆者は完全に否定することができない。そうした誤解を招く一因が、誰よりも竹内自身によって、自己のケースワーク論の全体を貫く思想が、十分に語られていない故ではないか、と考える。岡本氏が指摘する、孝橋と竹内の「社会福祉事象を捉える視点、観点の相違」についても、竹内の思想を明確化していくことによってこそ、その観点の相違はより鮮明に理解されるものとする。誤解を怖れず簡潔に表現するならば、孝橋がその思想的基盤

としている「マルクス経済学」と、竹内が思想的基盤としていると考えられる「社会的基督教」との、観点の相違を明らかにすることによって、孝橋理論と竹内理論の違いが説明できるのではないかと考える。竹内ケースワーク論の思想的基盤を問うという視覚は、竹内の「社会福祉事象を捉える視点、観点」を明らかにする、という意図においても、重要な視覚となると考える。

#### 4 岡本民夫氏による“ケースワークの科学的実践への貢献”に対する評価

では、竹内の弟子である岡本氏は、竹内ケースワーク論をどのように評価しているのだろうか。以下に、検討していきたい。

つまり、方面委員の職責は家族に対するケースワークにあるが、その際、方面委員は科学的・技術的なケースワークの規準を認識把握し、単なる「家族精神の強化」「親族間の親和」「家族生活の刷新」などの抽象的精神の昂揚ではなく、精神的、具体的プログラムを用いたケースワークを行うべきであるとしている。このように竹内氏によれば、方面委員による任意保護を中心とする「社会事業の再編成は、社会事業論の再編成ではなくして、社会事業実体の科学的・技術的再編成」でなくてはならない、と主張される<sup>(32)</sup>。

これは、1940年といういわば「戦争中のころ」に書かれた、「方面委員事業の技術的再編成<sup>(33)</sup>」という論文に対する評価であるが、社会事業自体の科学的・技術的再編成という、竹内が生涯をかけて取り組んだテーマが、この時期において明確化されていたことを重視した評価であると考えられる。岡本氏自身が、「実践の科学化」ということを1980年代から提案してきたと言われているが、<sup>(34)</sup>ケースワークが科学的技術であるべきことは既に竹内によって1940年から主張されていたことを示すもので、この、師である竹内の主張を弟子である岡本氏

が継承されていることを示す、一つの資料としても理解される。また一方で、竹内は岡本氏のみならず、戦後のソーシャルワーク研究・実践を牽引していく優秀な弟子を多く育てているが、そうした弟子たちによって竹内ケースワーク論がどのように継承されていったかについても、検証される必要があることに、思い至らしめられる。竹内の思想的基盤もまた、弟子たちに影響を及ぼし、またそれぞれに継承されているものと考えられるからだ。これもまた、今後検討を必要とする、重要な視角である。

## 5 吉田久一による“戦時下における竹内ケースワーク論”への批判と評価

最後に、吉田による先行研究を見ておきたい。吉田が「社会的基督教」とのかかわりについて竹内本人に確認しようとしたことは前にも触れたが、彼はその著書において、「竹内愛二は敬虔なクリスチャンであり、日本の「科学的」社会事業の開拓者であった<sup>(35)</sup>」と述べ、キリスト教信仰がそのケースワーク論の思想的基盤であることに着目し、重視している。そして戦時中の竹内ケースワーク論を、「日中戦争期」と「太平洋戦争期」の二期に分けられる、と分析<sup>(36)</sup>し、その上で、

S・C・Mのメンバーである竹内は、ケースワークの職能を、第一に個人の救済を自立独立の回復まで行うこと、第二に科学的社会事業であるケースワークを、デモクラティックな民衆運動に発展させ、最終的には社会問題の原因を除去し、ケースワークを要せざる社会の実現を理想とする、と楽観論を展開している<sup>(37)</sup>。

というように、「日中戦争期」における竹内ケースワーク論の特徴を捉えている<sup>(38)</sup>。この、吉田がいうところの「楽観論」とは、「社会的基督教」が提唱した「神の国観」、それは運動の中心人物であった中島重の宗教思想であったが、こ

の「神の国観」が神学正統派及び弁証法的神学の立場から「汎神論的世界観」などというように厳しい批判を受けた、その批判の具体的内容にも通じる捉え方である。<sup>(39)</sup>

そして「太平洋戦争期」においては、「太平洋戦争中の竹内の「個別生活指導法」には、全体主義的な職能奉仕者としての人間、キリスト教的ケースワークの「人格」としての課題の、二頭立ての思考が見え、その結合はあまり明瞭でない。また、その基礎科学である社会学と、その指導法の中心である教育的ケースワークの論理も明らかではない。」<sup>(40)</sup>というように、戦時体制下にある制約からか論旨の一貫性を保つことができていない竹内の論調を批判している。しかしこうした批判に続けて、「厚生事業論を主張しながらも、最後まで「人格」や「技術」としての厚生事業を追求した点は見逃さるべきでない」<sup>(41)</sup>というような評価にみられるごとく、吉田は竹内ケースワーク論の本質的な主張を見逃してはいない。それは、ケースワークの「技術」としての普遍性を主張するなかに、竹内の思想的な砦があったことを、把握していたようにも筆者には受け取れる。そのことは、「敬虔なクリスチャン」であることと、「科学的」社会事業の開拓者」であることを同時並行させて生きた竹内の、その生きざまを簡潔に捉え、竹内ケースワーク論を語り始める冒頭に、まずそのことを示す一文を置いていることに、表現されていると筆者には受け取れるからだ。

しかし「敬虔なクリスチャン」であることと、「科学的」社会事業の開拓者であることは、まるで二人の主人に仕えるごとく、相矛盾した生き方を自己に迫るものとなる、とも考えられる。しかしながらこの二つは、どちらも主人なのではなく、あくまでケースワークは「神の国」実現のための手段（技術）として捉えられていたのではないか。竹内が求めたのは「神の国」の実現であり、そのためにケースワークという技術を科学化し、世に広く行き渡らせようとしたのではないか。筆者が本論の基本に据えているのは、この視角である。

### III 竹内愛二の思想形成と「社会的基督教」

以上のような、それぞれの視角を念頭に置きつつ、まずは中島の「社会的基督教」とのかかわりから、竹内がそのケースワーク論の思想的基盤をどのように形成していったのか、わずかながらも明らかにしていきたい。

#### 1 「社会的基督教」と出会うまでの略歴<sup>(42)</sup>

竹内愛二は、1895（明治28）年6月22日、宮崎県日向の地に生まれた。共に牧会に励んでいた、牧師の父と婦人伝道師の母のもと、八人兄弟の次男として、経済的には恵まれないものの、キリスト教の家庭的雰囲気の中で幼少期を過ごした。しかし当時の地方における伝道は厳しく、聖書にみられるキリスト教への迫害に近い経験を、児童期に何度も経験した。やがて兵庫県明石に居を移したが、父が若くして他界したため、一時は同志社中学入学を諦めたが、援助して下さる方があって無事に入学。食堂で働きながら学ぶという、文字通りの苦学により卒業した。神学部への誘いもあったが、神戸の三菱造船所に工員として就職し、後に正社員となった。仕事帰りに YMCA の英語学校に通い、中学では常にトップクラスであった英語力に磨きをかけ、関東大震災のあった1923（大正12）年に退職して、アメリカへの留学を決意した。1924（大正13）年にアメリカ、カリフォルニア州のポモナ大学に入学、次いでオハイオ州のオベリン大学に転入学。1928（昭和3）年、同大学より B. A. の学位を受けた。次いで同大学の大学院に入学し、同時にウェスタン・リザーブ大学にも在籍して社会事業の研究と実習に従事した。1929（昭和4）年、オベリン大学大学院より M. A. の学位を受け、1930（昭和5）年に帰国。神戸女学院専門部講師、神戸女子神学校教授に就任し、1939（昭和14）年には同志社大学専任講師、のちに教授に就任した。この間、1930（昭和5）年8月、神戸雲内教会において「社会的基督教連盟」の設立準備会がもたれたが、その発起人として竹内は名

を連ねている。<sup>(43)</sup>つまり竹内は、帰国後すぐに中島の「社会的基督教」運動に参加したことになる。

## 2 「社会的基督教」との出会い

竹内が神戸三菱造船所を退職したのは、関東大震災の翌々年である1924（大正13）年だが、1年の休職を経てからの退職であった。そのため、休職中に震災直後の関東一円の惨状を見るとともに、被災者の援護活動を行っていた賀川豊彦（1888-1960）とも会って、「アメリカに行って“ハイカラ”になって帰ってきてはいかぬぞ」と助言を受けた、と後に語っている。<sup>(44)</sup>また、アメリカの大学で何を学ぶかは決まっていなかったものの、同志社と同じ組合教会派に属するポモナ大学と、同志社と密接な関係のあるオベリン大学を留学先に選んだこと<sup>(45)</sup>から、帰朝後は同志社にて学問を追究したいとの熱意を持っていたものと考えられる。そしてオベリン大学でケースワークと出会い、「これをひとつ勉強して、日本に持って帰ろう」と決意した。オベリン大学院と同時に籍をおいたウェスタン・リザーブ大学院では、ケースワーク実習から多くを学び、共同募金（Community Chest）及び社会福祉協議会（Council of Social Welfare）の実情も視察した。<sup>(46)</sup>そして1930（昭和5）年にアメリカから帰った竹内は、中島の「社会的基督教」と出会い、その運動に参加したのである。

それでは、竹内が出会った当時の中島や「社会的基督教」の状況は、どのようなものだったのだろうか。戦後、「社会的基督教」が「社会基督教」と名を改め、再出発した「社会基督教」誌の第一巻に掲載された、溝口のまとめを引用することにより、以下に振り返っておきたい。

わが社会基督教の運動もこの賀川氏らの運動により刺戟されて起つたものであり、最初は「雲の柱会」といつて、大正十四年十一月十九日同志社に於て同大教授であった故中島重博士などを中心に起こされたものである。

この団体の目的は当時勃興しつつあったマルキシズムの運動に対して、基督教の立場から社会問題を批判的に研究し、且つ個人主義的な基督教思想を批判してイエスの福音を正しく理解し宣伝しようというのであつた。

その後昭和二年十二月九日にはこの団体は「同志社労働者ミッション」として新発足した。その目的は更に積極的に福音を都市・農村・漁村の一般大衆に宣傳せねばならないという氣宇に燃えたものである。昭和四年一月十五日、「同志社労働者ミッション」は更に「日本労働者ミッション」と改称され、「凡ての労働者にイエスの福音を宣傳し、神の御旨にかなえる新社会の実現を期す」と宣言した。

しかるに同昭和四年三月末同志社にいわゆる「同志社騒動」が起り、中島重氏など社基運動の中心となつた人々が学園を去り、この運動は一時中断された。しかしこれが却つて社基運動の全国的拡大の契機となり、又、中島重氏は関西学院大学に移られ、これに新たに基督教傳道界、教育界及び社会事業界などより新たなる同志も合流して、昭和六年九月二十四日、京都 YMCA において五十名をもつて「社会的基督教徒関西聯盟」の発会式<sup>(47)</sup>が行われた。

竹内が出会った頃、中島は既に同志社から関西学院大学に移っていたが、かえってそれを期に運動は全国的に拡大する途上にあつた。ちょうどそうした時期に竹内は帰国して、この、1931（昭和6）年の「社会的基督教徒関西聯盟」の発会式に出席したのである。竹内が発会式に出席した証しとして、1932（昭和7）年5月に創刊された「社会的基督教」誌奥付には、「社会的基督教徒関西聯盟規約」と共に、第1期中央委員としてその名が記されている。竹内は當時を振り返って、次のように述懐している。

筆者が昭和十年に在米六ヶ年余、（この間にアメリカでも、未だその発

達の初期にあった)、専門社会事業を専攻して、帰朝すると、中島教授と、そのグループの人々は、従来の「日曜日だけの基督教」や、「唯だ個々人の靈魂の救い」などのみを説く基督教のありかたに、不満な人々、わけても同志社の神学部・科を中心とした他学部の出身者らは、教授のもとに集まり、日本各地の実地伝道、社会事業、あるいは教育界に進出して活躍することになった。しかも彼らは教会と密接に結びついた関係を保ち、且つそれを強化しようと努めたのである。<sup>(48)</sup>

またこれと同じ時期、竹内は SCM (Student Christian Movement 学生キリスト者運動) にも参加していたが、<sup>(49)</sup>竹内がこれらの運動と出会った頃の心の高鳴りをうかがわせる一文が、SCM の機関誌的役割を果たした『開拓者』に掲載されている。以下にその一部を引用する。

近代の基督者はイエスは在世中不義が黙認され保護された事を鋭く非難したと云ふ事や、彼は実際危険なる青年過激主義者で、彼の過激なる思想の故に当局が死に処したと云ふ事をよく知ってゐる。此のイエスの先例は今日の基督者をして又同じやうに今日の社会問題に対して急進的ならしめてゐるだらうか？ 否！ 否！ 彼等はカービーページの「イエスか基督教か」及び其他、水をまはしたやうな妥協した基督教とイエス自身の荒療治的な提議との間にある差異を暴露した幾多の書を読んでゐる。處が之で以つて彼等は気持ちよい執着を擲つてイエスの方法に一致する如き社会となすために革命しやうと団結して欲求するのか。断じて否！ 彼等（筆者注：保守主義者）は、今日の教会がその割合にふるはないのは現代生活の非同胞的態度や実行に対して甚だ微弱な抗議しかしてゐないと云ふ處に原因の一部があると云ふ事を指摘されて知ってゐる。

—中略—



彼等（筆者注：血気にはやる自由主義者）はかくする時は保守主義者との差異は、追求せんとする理想、価値又はゴールの差異にあるのではなく、彼等の採用する方法が信頼するに足るものであり、又彼等の提議する新制度が充実せるものである事を示した時に現はれるものであることを見出すであらう。かくて彼等はその注意を転じて新しい方法の完全と科学的試験の充実を計り、以つて人間が危惧している困難に耐え得る事を期すべきである。<sup>(50)</sup>

これは、翻訳として『開拓者』に投稿された文章ではあるが、書かれた時期は「社会的基督教徒関西聯盟」の発会式が行われたのと同じ1931（昭和6）年であり、当時の竹内の心情を伝える貴重な一文であるといえる。保守主義者と自由主義者とを対立的に描き、追求せんとする理想や価値又はゴールではなく、採用する方法によってこそ、両者の差異が現れると予言している。そして自由主義者としての竹内が採用する方法とは、まさしく「ケースワーク」であるものと考えられる。アメリカから持ち帰った、「ケースワーク」という新しい方法を、科学的試験の充実によって、人間が危惧している困難に耐え得よう努力していくことが、この時代を切り拓く鍵ともなる。そしてそれが自分の使命なのだ、と、声高に宣言した文章であると、筆者には受け取れる。

### 3 中島重の「社会的基督教」思想の特徴

それでは竹内が出会った、中島の「社会的基督教」思想とは如何なるものだったのか。本論ではその特徴である、「神の国」信仰と「新人格主義」の二つに絞って、その遠大なる思想の一端に触れておきたい。

中島が主導した「社会的基督教」とは、内面主義や個人主義といったプロテスタントが持つ宿命的な性質を反省し、人間の本性でもある社会性を回復した新しい人格によって、隣人愛が社会において具体的に実践されることを通し、

この世に「神の国」を来たらせようとする宗教思想運動であった。そしてこの思想における重要な概念である「人間の本性としての社会性」について、中島はその独特の表現により以下のように説明する。

我等すべては我執の囚虜であり、罪惡の固まりである。然れども亦我等すべてのうちに社会性をその本性として具備して居ることも事実である。社会性あるが故にこそ、他を愛するの精神があるのであり、他人と結合して社会を形成して居るのである。人類が社会を形成し、連帯に生きて居るといふは、社会性の故である。而して此社会性たるや決して一つの集団や社会内に限られたるものでなく、實にすべての人と結合して社会を形成し得る可能性を持てるものである。人間は實に宇宙的社会そのものの一員たる所の宇宙的社会とでもいふべきものを本具して居るのである。これは實に靈ともいふべく、又神性ともいふべき方面である。人間には利己的根本動向があるとともに、一面又斯の如き尊い神性の内具して居るといふことも事實である。<sup>(51)</sup>

そしてこの、本性としての社会性を人間に回復させるのは、イエス・キリストの十字架愛・贖罪愛であり、それによって高調された信仰によってこそ、国家を超えた人類の社会連帯は可能となり、「神の国」がこの世に実現されるという。こうした、社会性を回復した人格を、中島は“新人格”と称し、中島の宗教思想においては、この“新人格主義”が一つの重要な特徴であると考えられる。

そしてもうひとつ、中島の神学思想の特徴である「神の国」信仰とは、以下のようなものである。

今少しく具体的に言ふならば、基督教に於ては神の国の信仰の高調に在

り、その神の国もカトリック教に於けるが如き、権威主義・教権的教会制度と同一視せられるが如きものに非ずして、プロテスタンチズムの良心至上主義と、個人人格尊厳の精神とを套襲継承し乍ら更に之を社会本位的立場に於てアウフヘーベンしたる處のものでなくてはならぬ。更に突き込んで言ふならば人類の社会連帯を宇宙實在の神に於て基礎付け、その実現を以て神の国実現と観、その実現の基本動力を十字架愛・贖罪愛に於て見出す所の基督教でなくてはならぬのである。<sup>(52)</sup>

良心至上主義と個人人格尊厳の精神を継承しつつ、さらにこれを社会本位的にアウフヘーベンする、という中島独特の表現であるが、「社会本位的」というところに、彼の思想の特徴が最も鮮明に現れており、だからこそその思想運動は「社会的基督教」と名付けられたのだと理解できる。

それは、人類の社会連帯を志向するという、遠大なる「神の国」への信仰であり、そこへ向かおうとする基督者たちの主体性・基本動力は、十字架愛・贖罪愛に於て見出される。このように見出された自己のありようこそ、“新人格”としてのありようで、それゆえ自己の人格を重んじ尊ぶべきも当然で、それは神に対する義務でもあるとして、中島は次のようにいう。

人格の尊重せらるべきは、社会のすべての人の人格である。すべての人の人格は、神の子たるの性質を本具する人格であり、神の国の一員たるべき人格であるが故に、それをして神の子たるの自覚に到達せしめ、神の国のために贖罪愛を実行し、社会に奉仕するものたるの人格たらしめんが為めの尊重である。

—中略—

贖罪愛の精神そのものが、斯の如き人格尊重の精神を含んで居るのであり、贖罪愛の実践そのものが、斯の如き精神に於てのすべての人の人格の

培養育成を意味して居るのである。人格の尊厳といふことが、すべての人の人格の尊厳といふ意味であるとしたならば、我欲我執無き意味に於て、我人格も亦社会に於ける一つの人格として、平等に尊厳なるべきは固より当然である。これを重んじ尊ぶべきは神に対する義務である。<sup>(53)</sup>

こうした中島の、「社会的基督教」における宗教思想の、特に“新人格主義”と“神の国”信仰に着目しつつ、以下に竹内が「社会的基督教」とのかかわりにおいて、如何なる思想を形成したかについて確認していくことにする。

#### 4 竹内ケースワーク論の思想となった“新人格主義”

古くから、ケースワークが取り組んできた社会問題の筆頭は、貧困問題であった。幼い頃から、実体験として、貧困問題と向きあってきたに違いない竹内にとって、アメリカで出会ったケースワークは、まさに貧困問題と根本的に取り組むことのできる、希望の「技術」だったのではないか。そして帰国後に出会った、中島の「社会的基督教」もまた、それまで抱き続けてきたキリスト教信仰における疑問に答える、希望の宗教思想だったのではないか。このように竹内は、自分自身の実体験に裏付けられた深い理解と共鳴をもって、「社会的基督教」という宗教思想運動に、自己を投じていったものと考えられる。以下の文章から、そうした竹内の強い思いを読み取ることが出来る。

しからは唯だ個々の良き基督者たるに甘んじ今日の社会問題の渦中に在り乍ら孤軍奮闘すべしとの陳腐なる態度に還らんとするも、その不可能なるは既に證明しつつされた處である。今日の産業も政治も個人が如何に「基督者らしき」人士であらうとも個人としては如何ともなし得ざる機構となっている。故に吾々は地上に神の国を来らしめんと真剣に願ふものならば、基督者自ら政党を組織して、イエスの教訓を現代に最も應はしき方

法に依りて実践せねばならない。基督教の社会性を容認し、イエスの精神に従ひて社会を改造せんとする事に其の最大使命を見出せる米国社会的基督教徒中の有力なる分子が最近に至り提唱する處は此の結論である。<sup>(54)</sup>

これは竹内が、「米国社会的基督教徒中の有力なる分子」と呼ぶ、オペリン大学のホートン氏による来日講演や、米国のクリスチャン・センチュリー誌に掲載された所論をもとに、自己の見解を著した文章である。そのため、「政党を組織して」というような表現まで出現している。しかし政党ならずとも、「社会的基督教」という宗教思想運動に共鳴する者たちの組織が生まれ、同志と共にその運動に邁進できることに喜びを見出している竹内の思いが、文面から滲み出ているように思われる。1932（昭和7）年という、竹内がアメリカから帰国した翌年である。この運動が一つの組織となり、「社会的基督教」誌において同志がその思想を相互に高め合おうとする、まさにその時期に帰国したことは、竹内にとっては時宜を得た帰国であったといえるであろう。

そして、中島の宗教思想である“新人格主義”については、竹内独特のケースワーク事例への適用によって、次のように説明される。

欧米の社会事業は近時其発達の軌道をケース・ワークに見出している。然してこのケース・ワークの中心とする観念は、とりもなおさず此新人格主義である。ケース・ワークに於いては被救済者の独立自恃という事を非常に重んずる。故に欧米に於いては、法的には当然救恤金を受くる資格があっても、ケース・ワーカーが救恤金を支給することに依って独立自恃の精神を害なう憂いありと認めた場合は決して支給しないのである。然して此独立自恃の精神なるものは社会的なものであって、対家族とか其他対社会的関係が人間を独立自恃的なものにするのである。例えば欧州大戦当時独逸のザールブルツケン市の傷痍軍人保護委員会は数十名の傷痍軍

人を収容して、非常に科学的な職業再教育を施したのであるが、遂に失敗した。そして其理由として、如何に科学的な方法でも若し傷痍軍人に自立自恃の精神を養わせることが出来なかつたならば成功するものではない。然して斯くの如き精神は同様なハンディキャップを有する者を四十人五十人と収容しては涵養できるものではない。家族や親友や小社会に於ける社会関係が之を可能ならしむるのみであるというような報告をなしたのである。要するにケース・ワークは個人をどこ迄も社会的個人と観て、人格者として、自由意志の主として救済しようとするものである。故に其事業は個別的であればある丈社会的連帶的となるものである。<sup>(55)</sup>

個別的であればあるだけ社会的連帶的となる、という表現に、竹内独特の“新人格主義”の理解が表現され、またそれは、竹内ケースワーク論の思想ともなっていることが理解できる。さらに竹内はケースワークが、資本主義体制における必然の要素である貧困問題を、解決緩和することによって体制維持をはかる、そのための技術である、との批判を受けることに対して、以下のように反論している。

総合的科学的社会事業を提唱する事に依って筆者は現代に於ける社会事業の経済的根本性質に就て力説する事を怠り従て一種の反動的役割を演ずるものと思はれなば之より心外なる事はないであろう。此事は具眼の読者は充分に諒解されたる事と信ずる。一步進んで筆者は斯くの如き超時代的存在価値を有する科学的社会事業を忠実に遂行する事に依って各時代の根幹的疾患は明瞭にされ、其の真の対策を講じ得るものなる事を指摘し度いのである。斯くの如き社会事業は社会病の根本的診察を基礎としてのみ其の威力を発揮し得るものである。而して斯くの如き社会事業は決して資本主義社会制度上に浮ぶ泡沫ではないのである。斯界の有識者に依って斯く

の如き超時代的価値を有する社会事業が益々検討され遂行されん事を切に  
希うものである。<sup>(56)</sup>

竹内にとってケースワークは、一人の人と個別にかかわり、その人格を尊重することによって真の自立へと促し、社会に奉仕する人格として共に神の国建設にむけて努力する同志となるための、超時代的価値を有するものであり、問題の根本原因を明らかにすると共に、同胞との人格的つながりを基盤にした社会を実現する、社会変革にむかう運動としての意味をもつものであった。しかしそうした意図は、必ずしも正しく理解されず、表面的に理解され、誤解されるという運命にあり、この当時から竹内はそうした運命と闘っていたものと考えられる。

#### IV 結びにかえて

この「社会的基督教」は、1941（昭和16）年に日本が太平洋戦争に突入したことによって、思想や信仰の自由に対しても圧迫が加えられるようになったことから、1942（昭和17）年1月に解散を決するとともに、機関誌も1942年1月号（第11巻1号）をもって発行を断念するに到る。そして敗戦後の混乱がまだ続く1946（昭和21）年5月、この運動の支柱であった中島は、同志社大学法学部に「比較憲法学」の教授として復帰するものの、一度も教壇に立つことができないまま肺結核により永眠した。58才であった。その臨終に立ち会い、「屍を超えて進め」と遺言された竹内は、1950（昭和25）年、「社会的基督教」から「的」の字を除いた「社会基督教」誌を自身が中心となって発刊する。その「発刊の辞」に竹内は、以下のように綴っている。

我々は研ぎすましたナイフのような鋭い思想と言葉とで、神学上の論争

を繰返していることは、現実からの逃避そのものに終わる外はないことを、幾多の苦味い経験によって知った。そのような論争は、資本主義経済の積弊も、国際平和の破綻も、政治の墮落も、無産政党の腐敗も、労働運動の沈滞も、消費組合の没落も、社会事業の経済至上主義も、その他如何なる世界の又社会の問題も解決してはくれなかったのである。ただ若し現代の社会に基督に倣うて、愛と協同とを実践するために組織された基督教徒の一団又一団が、教会のまわりに生れでる他に道はないのである。<sup>(57)</sup>

第二次世界大戦の戦前から戦中にかけて、まさに国粹主義的な機運が高まるなかで繰り広げられたこの運動が、苦難の道を歩まねばならなかったのは当然であった。しかしこの苦難は、教会や神学者たちというキリスト教内部からも、<sup>(58)</sup>もたらされたのである。外部から受ける苦難よりも、受けるダメージは大きかったはずである。しかしそうした状況を打開するためには、「社会基督教」という宗教思想運動を、「現代の社会に基督に倣うて、愛と協同とを実践するために組織された基督教徒の一団又一団が、教会のまわりに生れでる」ことを目的として再出発させる他はない。竹内はそう決意し、その支柱になろうとしたものと考えられる。だが、この「社会基督教」誌は現在において、第5号までしか手にすることが出来ない。<sup>(59)</sup>

しかし竹内は、自身の最後の著作において以下のように述べている。

SCM (Student Christian Movement ; 筆者注) のこの動向を察知した「社会的基督教運動」が、特に関西において、故中島重教授を中心とする一グループによって活発に展開され、特にその機関誌月刊「社会的基督教」による文筆運動と、定期・不定期の研究会や、大会などによって、有力な活動をなし、よき成果をあげたと筆者は信じている。不幸にして、太平洋戦争の勃発とともに、国家権力によりこの機関誌は廃刊の止むなきに



至った。幸にしてその社会的基督教運動は、一九六八年に日本基督教社会福祉学会『基督教社会福祉学研究』によって継承されて今日に至って<sup>(60)</sup>いる。

竹内はこの、日本基督教社会福祉学会の初代会長を務めているが、この学会は「社会的基督教」という思想運動を引き継いだものであるという趣旨が、少なくとも竹内の心中には明確に存在していたことがわかる。現在、筆者もその学会員のひとりであるが、竹内のこの思い受けとめ、継承するためには、何よりも「社会的基督教」という宗教思想運動を検証しなおす必要があると考える。それには竹内のケースワーク論を、改めて読み解いていくために、本論が導き出した視角からの問い直しをすることも、必ずやその一助となるであろう。

本論はここまで、竹内のケースワーク論を「社会的基督教」とのかかわりから読み解くための新たな視角を、先行研究の検討によって導き出した。そして、それら全ての視角が前提とする、中島の「社会的基督教」思想の特徴と関連づけた竹内ケースワーク論の思想的基盤を、わずかながらも明らかに出来たものとする。竹内は、中島を中心とした同志との思想運動に参加し、主体的に運動を推進していくなかで、まさに、ケース・ワークという「新しい方法の完全と科学的試験の充実を計り、以て人間が危惧している困難に耐え得ることを期す」ことが、生涯をかけるべき使命であると決意した。「出発のころ」のこの決意が、竹内の「ケースワーク50年」を支えた思想的基盤であったことは、少なくとも明らかに出来たものとする。筆者もまた、さらに残された課題に、今後も取り組んでいく決意である。

## 注

- (1) 岡本民夫『ケースワーク研究』ミネルヴァ書房、1973年、94頁。
- (2) 岡本民夫「竹内愛二『ケースワークの理論と実際』解説」、竹内愛二著『ケー

スウォークの理論と実際』、戦前社会事業基本文献集④⑥、日本図書センター、1997年、3頁。

- (3) 嶋田啓一郎「発展する全体と社会的基督教—中島重とその時代—」、『キリスト教社会問題研究』、同志社大学人文科学研究所、1969年、162頁。
- (4) 「〔証言シリーズ〕昭和社會事業史の証言(8)「ケースワーク50年」』、『社会福祉研究』、第20号、鉄道弘済会、1977年、31～42頁。
- (5) それは、吉田による以下のような質問である。

「最初の出発点のころ、同志社中学校を卒業され、嶋田啓一郎さんもそうかもしれないが、当時中島重先生とか多くの方々が社会的キリスト教を唱道される時期、先生がケースワークについて最初にお出しになった『ケース・ウォークの理論と実際』の中でも、社会的な人格主義、あるいは新人格主義とかが主張されている。立教大学の菅先生などもそうだったが、同志社大学の社会的キリスト教ということで、先生にも出発点で何かそういう思想的土壌があったのでしょうか。」

この質問に対し竹内は、同志社中学卒業後、神戸三菱造船所に10年ほど勤め、大正12年の関東大震災の後退職し、アメリカに渡ってケースワークを学んだという経緯について説明するものの、肝心な社会的基督教と関わった思想的土壌についての回答は、以下のような不十分な内容にとどまっている。

「米国留学中に民主主義にふれ、ケースワークや共同募金の実際に参加して大いに教えられて帰国すると、いわゆる社会的キリスト教の大先達であり、当時同志社大学の故中島重教授に出あひまして、公私ともに非常に啓発されたわけです。「人格主義」というと先生が第一人者でしたね。」

- (6) 「座談会 日本社会福祉学会の歴史—創設期・初期を中心に(II)」、『社会福祉学』、第22巻1号、1981年、131-145頁。
- (7) 日本キリスト教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教歴史大事典』教文館、1988年より、「社会的福音〔英〕Social Gospel」の項目(638-639頁)の一部を引用しておく。「アメリカで19世紀末から20世紀にかけて起こったキリスト教徒の社会的救済運動。その代表的指導者のひとりにドイツ移民の子でバプテスト派牧師ラウシェンブッシュ、W. (Rauschenbusch, Walter 1861-1918) がいる。彼はマルクスと同様に、差別撤廃の心情をもって、他のアメリカの教会人を超教派的にキリスト教社会主義の立場から労働問題、貧困問題に立ち向かわせた。(後略)」
- (8) 同上座談会、142-143頁。嶋田はこの座談会で、中島と出会った当時の竹内について、次のように説明している。「竹内先生は、オベリン大学およびウェスタン・リザーブ大学の応用社会科に学び、ケース・ワークを専攻されていました。そのときアメリカで盛んであったラウセン・ブッシュの Social Christianity 運動を知り、昭和5年に帰朝されたのです。それが機縁となって、同じ思想傾向を

もつ、中島重先生に、私淑するようになったのです。」

- (9) 小倉襄二「キリスト教社会事業の論理—厚生事業体制と「抵抗」の問題—」同志社大学人文科学研究所編『戦時下抵抗の研究—キリスト者・自由主義者の場合—』みすず書房、1969年、127頁。
- これは、同志社大学人文科学研究所において、日本のキリスト教と社会問題、社会思想、社会事業との関係を研究しているグループが、「戦時下におけるキリスト者ならびに自由主義者の抵抗」という研究テーマをさだめて取り組み、『戦時下抵抗の研究—キリスト者・自由主義者の場合—I・II』という書名で出版されたなかの、小倉による論稿の一部である。
- (10) 小倉襄二、前掲書、131～132頁。
- (11) 小倉襄二、前掲書、102頁。
- (12) 小倉襄二、前掲書、128頁。
- (13) 筆者が『社会的基督教』誌に掲載された、「東亜共同体論」に関する論文等の本数を著者ごとに数えあげたところ、本数が多かった上位三名は、中島による15本、溝口による12本、竹内による11本であった。これら三名による論文等のタイトルを、発表順にあげておく。
- 中島重「「東亜共同体」の理想を掲げて全世界の基督教徒に訴ふ」『社会的基督教』7(12)、1938.12.
- 竹内愛二「社基一年の歩みを回顧して」『社会的基督教』7(12)、1938.12.
- 溝口靖夫「過ぎし日の東亜傳道とその示唆」『社会的基督教』7(12)、1938.12.
- 中島重「一九三九年の念頭に祈る」『社会的基督教』8(1)、1939.1.
- 中島重「抽象人道的基督教の保守性」『社会的基督教』8(1)、1939.1.
- 竹内愛二「東亜協同体と中華民国における基督教」『社会的基督教』8(1)、1939.1.
- 溝口靖夫「説教 興亜の氣息」『社会的基督教』8(2)、1939.2.
- 溝口靖夫「基督教の東洋的展開」『社会的基督教』8(2)、1939.2.
- 中島重「東亜新文化の基調としての社会的基督教」『社会的基督教』8(3)、1939.3.
- 中島重「東亜の新道德及び法律文化」『社会的基督教』8(4)、1939.4.
- 竹内愛二「東亜協同体と新しき社会事業」『社会的基督教』8(4)、1939.4.
- 中島重「共同体の理想と社会的基督教」『社会的基督教』8(6)、1939.6.
- 中島重「巻頭言 我等の進むべき道」『社会的基督教』8(7)、1939.7.
- 中島重「大乘精神の極地としての贖罪愛」『社会的基督教』8(7)、1939.7.
- 溝口靖夫「基督教の東洋的自然観」『社会的基督教』8(7)、1939.7.
- 竹内愛二「大陸文化工作としての基督教社会事業」『社会的基督教』8(7)、1939.7.
- 中島重「基督教に於ける連帯主義」『社会的基督教』8(8)、1939.8.
- 竹内愛二「社会的基督教傳道の新戦術」『社会的基督教』8(8)、1939.8.

- 竹内愛二「発題講演三 社基実践分野としての東亜社会事業」『社会的基督教』8(9)、1939.9.
- 溝口靖夫「発題講演五 基督教の東洋的展開の方向」『社会的基督教』8(9)、1939.9.
- 中島重「発題講演六 大乘哲学と社会的基督教」『社会的基督教』8(9)、1939.9.
- 竹内愛二「説教 萬民への福音」『社会的基督教』9(1)、1940.1.
- 溝口靖夫「近代支那民族運動と基督教（一）」『社会的基督教』9(2)、1940.2.
- 溝口靖夫「近代支那民族運動と基督教（二）」『社会的基督教』9(3)、1940.3.
- 溝口靖夫「近代支那民族運動と基督教（三）」『社会的基督教』9(4)、1940.4.
- 中島重「特別講演 公権力と宗教」『社会的基督教』9(6)、1940.6.
- 溝口靖夫「近代支那民族運動と基督教（四）」『社会的基督教』9(8)、1940.8.
- 中島重「贖罪愛の歴史観とその実践の宗教」『社会的基督教』9(9)、1940.9.
- 竹内愛二「神中心のヒューマンイズムと社会事業」『社会的基督教』9(9)、1940.9.
- 溝口靖夫「世界的転換期に於ける社会的基督教運動の進展」『社会的基督教』9(9)、1940.9.
- 中島重「巻頭言 東洋的・社会的基督教の炬火前に在り合同すべし」『社会的基督教』9(10)、1940.10.
- 中島重「われらの基督教はこれからだ」『社会的基督教』9(10)、1940.10.
- 竹内愛二「協同的協同体としての隣組」『社会的基督教』9(10)、1940.10.
- 竹内愛二「新体制の宗教的推進力」『社会的基督教』9(11)、1940.11.
- 溝口靖夫「東亜共栄圏と基督者の使命」『社会的基督教』10(10)、1941.10.
- 中島重「天意に協ふものは勝つ」『社会的基督教』11(1)、1942.1.
- 竹内愛二「論文 新亜細亜建設と我等の使命」『社会的基督教』11(1)、1942.1.
- 溝口靖夫「新亜細亜の黎明と基督教」『社会的基督教』11(1)、1942.1.
- (14) 小倉襄二、前掲書、132～133頁。
- (15) 廣松渉、子安宣邦、三島憲一、宮本久雄、佐々木力、野家啓一、末木文美士編著『岩波 哲学・思想辞典』、岩波書店、1998年より、「東亜共同体論」と「三木清」の項目には、以下のように相違した見解が示されている。
- 項目「東亜共同体論」よりの一部抜粋として、「1930年代には石原莞爾らの東亜連盟論、近衛文麿や後藤隆之助ら昭和研究会が唱えた東亜共同体論などが登場し、再度日中提携論が叫ばれた。狭義には、東亜共同体論は、この昭和研究会の理論を指している。それは、日中戦争の拡大に伴って直面した中国の反日感情との<和解>のための<協同主義>に基づく連帯という主張であったが、結局は日本の中国侵略に追隨する運命にあった（注：傍点筆者）（桂島宣弘）1149～1150頁。」と記されている。
- これに対し、項目「三木清」よりの一部抜粋として、「その後、日中開戦によ

って体制への批判が閉塞していった時期には、時局に参加しながら変革をこころみる道を模索、「支那事変の世界的意義」をとなえ、自ら近衛文麿のブレン集団である昭和研究会の指導的立場に立った。そこで理念として提示した〈協同主義〉は、諸民族が協同する東亜共同体、そして自由と統制を媒介した新体制の実現をはかるものであった〔米谷匡史〕1542頁。〕と記されている

つまり「東亜共同体論」については、中国への侵略に加担するための道具とされた、というように批判する識者もいれば、三木らの本来の意図は高く評価されるべきであると強く主張する識者もいるのだ。今日においても、その見解は定まっておらず、強調点あるいは結論における対立は解消されていない。

「東亜共同体論」を扱った近著を、以下にあげておく。

酒井三郎『昭和研究会—ある知識人集団の軌跡』TBSブリタニカ、1979年。

米谷匡史編『尾崎秀美時評集—日中戦争期の東アジア』平凡社、2004年。

内田弘編『三木清 東亜共同体論集』こぶし書房、2007年。

三木 清『東亜共同体の哲学—世界史的立場と近代東アジア』書肆心水、2007年。

松本三之介『近代日本の中国認識—徳川期儒学から東亜共同体論まで』以文社、2011年。

- (16) 遠藤浩「1920～30年代二つの SCM と YMCA—日本 YMCA 「大陸事業」と「東亜」論との関連を焦点として—」『キリスト教社会問題研究』第63号、同志社大学人文科学研究所、2014年、89頁。
- (17) 杉山博昭「戦時下における竹内愛二」『宇部短期大学学術報告』35、1998年、43頁。
- (18) 杉山博昭、前掲書、47頁。
- (19) 戦争神経症は患者の無意識の心理過程による「神経症化」であり、心理的な「防衛機制」がその原因である、というように認識され、戦争神経症への対処が、ケースワークの背景的原理を社会的なものから心理・精神的なものへと移行させる、ひとつの契機となった、ともいわれている。(岡本民夫『ケースワーク研究』、37～38頁。)
- (20) 岡本民夫、前掲書、5頁。
- (21) 吉田久一、阿部志郎、一番ヶ瀬康子「シンポジウム=社会福祉思想の日本の特質」、吉田久一編著『社会福祉の日本の特質』河島書店、1986年、43頁。
- (22) ロロ・メイ著、浅野満訳「心理学における実存的動向の起源と意義」、ロロ・メイ、E. エンジェル、H. E. エレンバーガー著、伊東博、浅野満、古屋健治訳『実存—心理学と精神医学の新しい視点』岩崎学術出版、1977年、49頁。
- (23) 前掲書、53頁。
- (24) 杉山博昭、前掲書、47頁。
- (25) 孝橋正一『続社会事業の基本問題—社会科学的方法論による批判的研究—』ミネ

- ルヴァ書房、1973年。
- (26) 孝橋正一、前掲書、56～57頁。
  - (27) 宮田和明「社会福祉論争史」、中村裕一・一番ヶ瀬康子・右田紀久恵監修、岡本民夫・田端光美・濱野一郎・古川孝順・宮田和明編集『エンサイクロペディア社会福祉学』中央法規出版、2007年、320頁。
  - (28) 宮田和明、前掲書、320頁。
  - (29) 岡本民夫「日本におけるソーシャルワーカー理論と実践～過去・現在・未来～(その2)」『ソーシャルワーカー』第14号、日本ソーシャルワーカー協会、20015年、2頁。
  - (30) 岡本民夫、前掲書、2～3頁。
  - (31) 岡本民夫、前掲書、3頁。
  - (32) 岡本民夫、『ケースワーク研究』、96～97頁。
  - (33) 竹内愛二、「方面委員事業の技術的再編成」『社会事業』24(8)、1940年、1～17頁。
  - (34) 岡本民夫「日本におけるソーシャルワーカー理論と実践～過去・現在・未来～(その2)」、2頁。
  - (35) 吉田久一『社会福祉と日本の宗教思想—仏教・儒教・キリスト教の福祉思想』勁草書房、2003年、293頁。
  - (36) 吉田久一、前掲書、293頁。
  - (37) 同上
  - (38) ここで吉田は、竹内を「S・C・Mのメンバーである」としている。しかし一般に「S・C・M」とは「Student Christian Movement (学生キリスト者運動)」のことをいい、竹内もその運動に参加していた(中原賢次、『キリスト者学生運動史—昭和初期のSCMの闘い—』日本YMA同盟出版部、1962年、300頁)。しかし学生キリスト者運動(SCM)は、1932年7月の第42回夏期学校において一部の参加学生が、プログラムの進行を困難ならしめる非難攻撃をするなどしたことにより、予定の1日を残して夏期学校を解散することになり、それを期に分裂自壊したとされる。このことから、「日中戦争期」に活動をしていたのは「Social Christian Movement (社会的基督教)」の方ということになる。
  - (39) こうした批判については、嶋田啓一郎「発展する全体と社会的基督教—中島重とその時代—」(『キリスト教社会問題研究』第14・15号、1969年。)に詳述されている。しかし嶋田は、「その思惟方向はあくまで内在論的であって、終末論的視点を見失っていることが、聖書の立場からは、鋭く批判されなければならぬ致命的なものとなっているのではあるけれども、中島氏が、宗教的思惟を受けいれようとする人間社会の現実的基盤を掘りさげ、それとキリスト教思想とのそれぞれの発展段階的な対応をえぐり出そうとしていることは、宗教と社会的行動の関係を問おうとする者にとっては、極めて示唆多きものと言わなくてはならぬ。」(嶋

- 田啓一郎「中島重の社会哲学と社会的基督教」『福音と社会』日本基督教団出版  
 極、1971年、264頁。) というようにその価値を認めると共に、「社会的基督教」  
 が果敢な社会的実践と結びついていったことについて、重要な意義があると評価  
 している。(嶋田啓一郎「発展する全体と社会的基督教—中島重とその時代—」、  
 166頁。)
- (40) 吉田久一、前掲書、297頁。
- (41) 同上
- (42) 竹内の生涯については、『基督教社会福祉学研究』(第13号、日本基督教社会福祉  
 学会、1980年)に、松島正儀(1904-1997)、小田兼三氏、嶋田氏、太田義弘氏に  
 よる追悼の記録が掲載されている。また、武田健氏による「竹内愛二先生をしの  
 んで」と題された記録が『社会福祉学』(第21-1号、日本社会福祉学会、1980  
 年)に、岡本氏による「プロフィール」と題された記録が、岡本民夫「竹内愛二  
 『ケースワークの理論と実際』解説」、竹内愛二『ケース・ワークの理論と実  
 際』(戦前期社会事業基本文献集⑩、日本図書センター、1997年)に掲載されて  
 いる。本文は、それらをもとに作成したものであるが、竹内が同志社大学の嘱託  
 講師に就任したのは、1931(昭和6)年という説(中西よしお「近代日本社会福  
 祉史と同志社」関係年表(戦前編)井垣章二・小倉襄二・加藤博史・住谷馨、  
 同志社大学社会福祉学会編『社会福祉の先駆者たち』、筒井書房、2004年、  
 328~362頁)もあり、今後さらなる調査により正確な年譜を確定していく必要が  
 ある。
- (43) 嶋田啓一郎「発展する全体と社会的基督教—中島重とその時代—」、167頁。
- (44) 前掲資料「ケースワーク50年」、32頁。
- (45) 竹内愛二「日本における基督教社会福祉の理論及び実践の発展」『基督教社会福  
 祉学研究』第12号、日本基督教社会福祉学会、1979年、70頁。
- (46) 同上。
- (47) 溝口靖夫「社会基督教運動の展開」『社会基督教』第一巻、第一号、1950年、  
 8~9頁。
- 参考までに、中島重と「社会的基督教」についての先行研究の主なものを以下  
 にあげておく。
- 嶋田啓一郎「発展する全体と社会的基督教—中島重とその時代—」、『キリスト教  
 社会問題研究』第14・15号、1969年。
- 嶋田啓一郎「中島重の社会哲学と社会的基督教」『福音と社会』日本基督教団出  
 版局、1971年。
- 武邦保「『社会的基督教』における中島重」『キリスト教社会問題研究』第20号、  
 1972年、40~74頁。
- 武邦保「社会的基督教と弁証法—バルト思想との関連—」『キリスト教社会問題

- 研究』第22号、1974年、22～50頁。
- 武邦保「『学生キリスト教運動（S・C・M）』の思想と行動』『キリスト教社会問題研究』第26号、1977年、40～70頁。
- 武邦保「雑誌『社会的基督教』の一研究—（一九三二年—四一年、月刊・発行人・中島重）—」『キリスト教社会問題研究』第37号、1989年、243～258頁
- 倉橋克人「日本における『社会的キリスト教』の胎動—中島重と賀川豊彦の出会いをめぐって—」『キリスト教社会問題研究』第59号、2010年、1～48頁。
- 倉橋克人「中島重と『学生キリスト教運動（SCM）』（1）」『キリスト教社会問題研究』第61号、2013年、91～126頁。
- 倉橋克人「中島重と『学生キリスト教運動（SCM）』（2）」『キリスト教社会問題研究』第62号、2014年、1～35頁。
- (48) 竹内愛二「日本における基督教社会福祉の理論及び実践の発展」、『基督教社会福祉学研究』第12号、1979年、71頁。
- (49) 竹内が、「社会的基督教」が誕生する直接的な契機ともなった「SCM（学生キリスト者運動）」にも参加していたことは前にも述べた。その参加の経緯は不明だが、このように『開拓者』にも寄稿していることから、その活動の一端をうかがい知ることができる。
- (50) 竹内愛二「保守主義を克服せんには—ブルース・カリーに依る—」、『開拓者』、1931年、20～24頁。
- (51) 中島重『社会的基督教の本質—贖罪愛の宗教—』日獨書院、1923年、29～30頁。
- (52) 中島重、前掲書、16頁。
- (53) 中島重、前掲書、191頁。
- (54) 竹内愛二「米国に於ける社会的基督教の再台頭より実践への進展』『社会的基督教』第1巻5号、1932年、5～8頁。
- (55) 竹内愛二「新人格主義の実践=断想』『社会的基督教』第8巻10号、1939年、28頁。
- (56) 竹内愛二「社会事業の超時代的存在価値』『社会的基督教』第4巻2号、1935年、15～16頁。
- (57) 竹内愛二「『社会基督教』の発刊』『社会基督教』第1巻1号、1950年、1頁。
- (58) こうしたキリスト教内部からもたらされた苦難を想起させる、その運動の発端ともなった賀川と「社会的基督教」の関係についての記述を、以下に紹介しておく。
- 「その当時の日本基督教会の指導者たちは、教会の建設をはかるとともに、伝道者の養成に努め、地味にしかも徹底的に一事に打ちこんでいた。新聞の話題になることなど好むところではなかった。それゆえ、賀川の少ない兵力、しかも兵糧も弾薬も十分でない戦い方を非難した。それに加えバルト神学が移入されて、教職者の関心がそちらに向いてゆくようになると、社会問題とか文化を強調する



行き方や、実践的な問題を多くあつかう敬虔主義的な特徴なども軽視せられ、賀川が中心となっている「神の国運動」には一層多くの批判が向けられた。

その上、賀川が主宰するイエスの友会に対し、一つの教派をつくるためのものだろうか、神の国運動は賀川を指導者にした教会をつくるだろうかという憶測が巷にとんでいた。ところが賀川はそうした挙動は微塵もなかった。S・C・Mの誘いも、また中島重らの社会的基督教の結成に加盟をすすめられても、断固としてそれを拒絶した。」(横山春一「福音主義神学の系譜と賀川豊彦—高倉徳太郎著『福音的基督教』を中心として」日本プロテスタント史研究会編『日本プロテスタント史の諸問題』雄山閣、1983年、253～254頁。)

- (59) 「社会基督教」誌は、この第5号をもって廃刊されたものと考えられる。しかしその経緯等については、今回明らかにすることが出来なかった。
- (60) 竹内愛二『社会福祉の哲学—新実存主義的考察—』相川書房、1979年、301頁。

(第18期第3研究会による成果)